研　修　参　加　報　告　書

令和　５年　８月２８日

会　派　名　江南クラブ
会派代表者　稲山　明敏

参加者：（オンライン）片山　裕之、土井　紫
　　（来　　所）牧野　行洋

研修参加の結果について、次のとおり報告します。

年 月 日	令和５年７月３１日（月）　～　８月１日（火）
研修時間	７月３１日（月）１３：１５～１６：３５ ８月　１日（火）　９：００～１２：２０
研修場所	全国市町村国際文化研修所（ＪＩＡＭ）、オンライン（Ｚｏｏｍ）
研修内容	令和５年度　第１回市町村議会議員特別セミナー ＊＊＊ ７月３１日（月） １３：１５～１４：４５ 脱炭素先行地域「真庭」の挑戦～地域資源を生かした真庭市の戦略～ 　岡山県真庭市 市長　太田昇 氏 １５：０５～１６：３５ 未来の年表～人口減少日本で地方に起きること、すべきこと～ 　一般社団法人 人口減少対策総合研究所 理事長　河合雅司 氏 ＊＊＊ ８月　１日（火） ９：００～１０：３０ Ｚ世代とこれからのまちづくり 　芝浦工業大学 教育イノベーション推進センター 教授　原田曜平 氏 １０：５０～１２：２０ その地域づくり、古くない？ 　～全国２８０以上の自治体と共創してきた、地域づくりの秘訣～ 　株式会社あわえ 代表取締役　吉田基晴 氏

研　修　参　加　報　告　書

■目的

　国内外の情勢が激しく変動する今、態様も要請も新たな局面に入ろうとしている時代を的確に捉えたうえで、自治体議員として行政課題に向き合うという使命に応えるため、先進地域の事例や時代の分析を第一人者に学ぶこと。

■内容

全国市町村国際文化研修所（ＪＩＡＭ）にて１８５名、
オンライン（Ｚｏｏｍ）にて７５名が参加
＊＊＊

令和５年７月３１日（月）研修１日目

１３：１５～１４：４５
『脱炭素先行地域「真庭」の挑戦　～地域資源を生かした真庭市の戦略～』
講師：岡山県真庭市 市長　太田昇 氏

　市域の約８割が森林である中山間地域に位置し、市内産業が林業に集中するという「不利」な地域特性を逆手に取り、木材を使ったバイオマス・太陽光・水力エネルギーを利用した脱炭素先行地域として成功している真庭市市長が取り組みを語った。

　真庭市の成功例は､発見してしまえば実は豊富な地域資源に依拠するところがあり、江南市で単純に模倣できるものではない。一方で、その「発見」また展開には、「再生可能エネルギー自給率１００％のまちを目指す」という明瞭でメッセージ性の高い主題が一貫して存在することが原動力になっていると読み取れた。これは江南市において現状十分といえず、かつ膨大な原資を投じずとも持てるものであり、学ぶべきである。

　特筆すべきは、真庭市が「少子高齢化」「中山間地域」などといった負の印象を持つ事象を逆転の発想で捉えなおし、富裕さや発展を目指すのでなく「『ひと』の幸せと『まち』の魅力の向上」に焦点を合わせ、一貫して地域内で経済を回すことを考えている点である。

　先述の再生可能エネルギーによる発電以外にも、生ごみ・し尿を液肥化して市内農業へ循環させる事業、デジタル地域通貨「まにこいん」事業など、他地域や海外に依存しない市内経済の確立を軸にしたアイデアに次々と取り組んでいる。

　こうした先進事例を紹介される際、気になるのはいかにして市内の合意を形成したのかという点である。真庭市では「真庭ＳＤＧｓ円卓会議」「真庭ＳＤＧｓミーティング」を開催し、市民自身が市の方針を考え、共有する場を設けていた。市長は前面に出ることなく、市民を主体とする運営を心掛けていたという解説が印象的だった。また「再生可能エネルギー自給率１００％のまちを目指す」という明瞭で時代に適応し、国際的な要請をも踏まえた主題を市がしっかりと掲げている点も、市民が合意形成するのに寄与していると感じた。

１５：０５～１６：３５
「未来の年表　～人口減少日本で地方に起きること、すべきこと～」
講師：一般社団法人 人口減少対策総合研究所 理事長　河合雅司 氏

的確な指摘が評価され注目された講師著書によって既知の認識とはなっているが、少子化がもはや歯止めのきかない状態になっており、少なくとも四半世紀は人口が急速かつ決定的に減少していくことについて解説された。
そんな中で地域に求められるのは、少子化・高齢化の実態を適切に理解し、それに寄り添った「戦略的に縮む」という方向性での成長を目指すことであるとの指摘があった。
本講義で特徴的だったのは、市場を意識した「少子高齢化時代」の戦略の提示である。少子化により成年世代が減り、また高齢化の内実は１人暮らし・女性（低年金）・貧困高齢層の増加であることから、自治体として成立するための市場を維持するために、薄利多売からの脱却を目指さなければならない。また人口が減少すれば商圏規模を維持することができず、サービス産業の撤退、ひいては住民の生活コストの増大を招く。こうした指摘は、江南市においても十分に参酌するべき視点である。
働き手も減少する中、行政サービスも「安ければ安い方が良い」という呪縛を打ち破るべきであり、「暮らしやすい生活都市」との特性を守るため、少なくとも医療サービスや総合スーパーの撤退を招かない程度に商圏規模を維持する人口政策が必要である。
講師は自治体間における人口流出について（具体的には東京一極集中に関するデータを用いて）、２０代前半女性の流出が原因となっていると指摘する。江南市においても、高齢化が進む中、こうした層の人口を惹きつける（少なくとも手放さない）施策が十分に展開できているとは評価できない。近隣市町と子育て人口を取り合うのでなく、江南市で生まれ育った若年人口を取りこぼさない努力が必要であると感じた。

＊＊＊

令和５年８月　１日（火）研修２日目

９：００～１０：３０
「Ｚ世代とこれからのまちづくり」
講師：芝浦工業大学 教育イノベーション推進センター 教授　原田曜平 氏

生年とその時代背景によって、集団をある程度の特徴を持って分類する「世代論」について解説を受け、今後の社会を方向付ける新たな世代「Ｚ世代」について特徴を学んだ。
団塊世代を代表する日本の世代論と、米国の「Generation X」に始まる世代論との違いが、インターネットの普及によって差異が消失し重なった点、新たな「Ｚ世代」

（講師訳語）について、自治体議員である参加者の多くが実感できていない実態も踏まえ、理解を深めることが要旨であった。

Ｚ世代の特徴として、少子化が深刻になり超人手不足となった社会を前提にしていることから「無理せずまったり（Chill）」、いいねに基づくＳＮＳとともに生きていることから「自己承認欲求が強い（Me）」を挙げる。若い人に選ばれる市場（まち）の価値を形成するためには、この「Chill&Me」を押さえなければならないという。

当然、江南市にも社会にも様々な世代が存在し、いずれも尊重した地域づくりを進められなければならないことは間違いない。一方で、もっとも若い層であるＺ世代の態様はもっとも正直に時代を反映していること、またもっとも長く消費生活を営んでいく世代でもあることから、これからの社会づくりにおいてＺ世代への特段の理解・共感が必要であるという指摘はもっともに感じた。

さらに為政者・役所幹部には中高年が多く、若い世代の考え・文化との乖離も大きい。彼らを理解し、そこに焦点を合わせたマーケティングを行うことと、若い世代のみを優遇することは全く違う。それを丁寧に説明し、多世代からの理解を得られるように努めながら実践していくことは、今後の地域の生き残りに不可欠だと感じた。

１０：５０～１２：２０
「その地域づくり、古くない？
～全国２８０以上の自治体と共創してきた、地域づくりの秘訣～」
講師：株式会社あわえ 代表取締役　吉田基晴 氏

自ら東京で起業した会社を徳島県美浜町に持ち帰ったことで、人材不足という経営課題を解決し、地域振興にも深く関与することとなり、ひいては２８５もの自治体へコンサルティングやマッチングイベント出展など支援した実績を誇る講師から、活動実績の紹介を通して「まちづくり」に本来必要な考え方を学んだ。

「近隣自治体もやっているから」「国の方針だから」「交付金があるから」といった理由でなく、まちづくりによって何を為したいのか、をはっきりさせた上で取り組む必要があるという講師の言動には一貫した力強さを感じた。

講師は持続可能な地域・社会とは、世代交代・役割交代といった「循環関係が途絶えていないこと」と考える。好調な事業を惰性で続けていては十分でなく、常に新しい種を蒔くことこそが社会の持続可能性を守る。少子化により若者が減ると恐ろしいのは「チャレンジが絶滅寸前」であることだと指摘する。若い世代を奪い合うのでなく分かち合って、地域に価値を生み出し、地域内で経済を循環させる。実務者である講師の実践は、他の講義で学術的に語られた理念を体現しているようだった。

「オフィス（事業者）を誘致する」ことばかり考えていると、何のための誘致なのかが分からなくなり、その後の地域の発展につながらない。講師は少子高齢化・人材不足の時代にあって、地域にかけている「『チャレンジ』を誘致する」考えでコンサルティング・マッチング等を展開しているという。江南市でも、現状の経済的・人的資源では心許ないという共通理解はあるが､何のためにそうした資源を獲得するのか、という目的に関する共通認識は足りていないと感じている。また「ＳＤＧｓ」「持続

可能な〇〇」といった言葉が流行しているが、その本質に迫る検討に、江南市は向き合えているだろうか。

講師が会社を移した美浜町は美しい海に臨する地域であり、実績を表面だけ聞くと「うちの地域とは違う、恵まれている」と安易に思ってしまいがちだが、その裏側にある考え方にこそ学ぶことが多かった。

■所感

時代の変遷には、いつの世も受け入れがたく抗いたいという層の存在が付随する。一方で今、新型コロナウイルス禍を経て、個人の望むと望まざるとに関わらず、時代は否応なしに変化するのだということを、かなり多くの人々が痛感する貴重な時機が到来している。２日間にわたる本セミナーでは、その裏にある時代の変化を学術的・構造的に分解し、理解を進めることが出来た。

また中高年層の多くが実感できていない「少子高齢化の先にある社会」「Ｚ世代」といったテーマについて、その提唱者でもある真の第一人者から詳細な解説を受けられたことは大変有意義な成果であった。今回、江南クラブからは若手議員が参加したが、ぜひ中堅・ベテラン議員にも直接講師から聞いてほしい言葉も多かった。

「真庭市」「美浜町」といった具体的な事例も登場したが、こうしたときにはつい「森林や海など分かりやすい魅力があって羨ましい、江南市は何もない」と考えがちである。しかしながら、講師の実践の基本にある理念・目的意識を、セミナーを通して知ることができ、江南市に欠けているものは資源より寧ろ理念であると痛感した。資金も人材も時間も限られている中、各自治体が何を実現できるかは「何を実現したいか」「どんなまちを目指したいか」という具体的な主題に掛かっている。

真庭市では再生可能エネルギー、美浜町ではチャレンジの誘致。それが決まれば、このためには予算を割く、この事業はこう方向付ける、といった行政の効率化も図れるだろう。市としてどんな道を歩むかが曖昧なままでは、できることは国や他市町の追従に留まり、住民の満足度も低いままになってしまう。実際に事業を行ったり、計画を立てたりするのは事業者であり、役所職員であるかもしれない。だが、市が目指す方向を定めるというのはまさに政治的判断であり、政治の役割である。

このことを、学術的指摘、他市町の実践に裏打ちされた形で再認識できたのが、本セミナーの成果であったと感じている。